

標準神経病学 第2版

水野美邦 ● 監修
栗原照幸, 中野今治 ● 編

東京女子医科大学名誉教授／メディカルクリニック柿の木坂・院長 岩田 誠

これは、極めて便利な書物である。帯には、学生のための神経内科の教科書、と書いてはあるが、どうして、どうして、この書物に書かれている内容は相当に高度であり、研修医どころか、神経内科の専門医の座右の書としても、十分に活用できる内容である。しかも、高度な内容が実に要領よく、わかりやすく説明されているので、学生が読んだとしても、十分に内容を把握していくことができよう。それにしても、よくまあ、これだけの内容の濃い書物を、五百数十ページにまとめられたものと、感心するのである。

評者が特に感心したのは、この書物の1/5が、筋肉と末梢神経の病気の記述に当てられていることである。神経系の病気を取り扱う科としては、神経内科のほか、脳神経外科、整形外科、そして精神医学があり、多くの神経系疾患は、これらのうちの複数の科における共通の診療対象である。しかし、筋肉疾患と末梢神経障害とは、それらのほとんどが神経内科の独壇場である。そこに大きく焦点を当てた編集方針は、極めて的を射たものとして、評者の共感を呼ぶ。

この書物のもう1つの魅力は、巻頭に示された、脳解剖と脳病理のカ

ラー写真、そして所々に散りばめられた、電気生理学検査の手技や所見に関する記載である。神経疾患の日常診療においては、電気生理学検査を神経学的診察の一部として利用していかなければならないとする著者らの想いが、ひしひしと伝わってくるのを感じる。この想いには、実は1世紀以上にわたる歴史がある。そろそろ出版後100年を迎えるDejerineの症候学の教科書『神経系疾患の症候学 (Sémiologie des Affections du Système Nerveux)』においても、当時まだ未発達であったとはいえ、電気生理学的検査と脊髄液検査は、症候学の一部として取り込まれている。何もハンマーをふるうだけが症候学ではないということは、1世紀も前から主張されてきたことなのである。神経症候学の裾野の幅広さを知る上でも、本書の存在は心強い。

ここであえて難点を挙げるとすれば、いくつかの説明図における明らかな誤りである。図1-1では、下行性運動路の内包における体部位局在が前後逆になっているために、皮質核路線維が脊髄にまで達しているように描かれてしまっているし、図1-2では薄核の位置が違っている。また、図5-1で示された滑車神経の走行も間違っている。図5-18の



「Mollaretの三角」なる神経回路の描き方も、Mollaretの母国フランスにおける今日一般の概念とは大きく異なっている。これらの間違いは些細なことではあるが、何も知らずに本書物に接する初心者にとっては、生涯にわたる重大な影響を及ぼすものであるので、再版される際にはぜひ修正されるべきであろう。

さて、評者の下には、かつて中国からの留学生が多かった。日本語をよくする彼らは、日本語で書かれた神経疾患の教科書を強く求めていた。この書物を読み終えた今、評者は、「今ここに新しく良書有り」と、今は母国に戻っている彼らに伝えて、この書物を薦めたいと思っている。

※ 図1-1, 図1-2, 図5-1, 図5-18の正しい図は医学書院ホームページの正誤表からご覧いただけます。

B5 頁632 2012年
定価7,350円
(本体7,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-00601-9]

医学書院刊